

耳鼻咽喉科研修プログラム

初期研修 2 年目の自由選択期間に1-8か月の選択ができる。

1. 一般目標(General Instructional Objectives: GIO)

基礎的な耳鼻咽喉科疾患、検査の知識および診療手技を習得し、プライマリケア医として、耳鼻咽喉科疾患の鑑別診断および初期対応を的確に行うことのできる能力を身に着ける。

2. 行動目標(Specific Behavioral Objectives: SBOs)

- 1) 耳鼻咽喉科診察に必要な基本的な解剖、生理を理解する。
- 2) 耳鏡、鼻鏡、ファイバースコープなどを用いて、耳、鼻、咽頭、喉頭の所見を正確に取ることができる。
- 3) 問診、視診から、診断のために必要な検査を想定することができる。
- 4) 中耳炎などの小児の耳鼻咽喉科疾患について理解し、小児の診察ができる。
- 5) 標準純音聴力検査を理解し、その結果について臨床的意味を説明することができる。
- 6) めまい患者の問診、眼振所見、聴力検査などから、鑑別疾患をあげることができる。
- 7) 扁桃周囲膿瘍、喉頭蓋炎、喉頭浮腫などの気道閉塞につながる緊急疾患を鑑別し、初期対応ができる。
- 8) 鼻出血の初期対応ができる。
- 9) 症状、鼻内所見、画像を含む検査所見などから、アレルギー性鼻炎、急性・慢性副鼻腔炎を診断し、治療法を選択できる。
- 10) 突発性難聴、顔面神経麻痺など発症早期に治療が必要である非炎症性疾患を診断し、早期治療の必要性を説明できる。
- 11) 外耳道、鼻腔、外耳および咽喉頭の異物を診断し、治療に参加できる。
- 12) 鼻骨骨折、眼窩吹き抜け骨折などの外傷を診断し、手術適応を判断できる。
- 13) 頭頸部腫瘍の部位による特徴を理解して、診察、治療に参加できる。
- 14) 手術の進行を理解しながら、助手を務められる。
- 15) 疾患ごとに異なる術後合併症を理解して、術後管理を行うことができる。

3. 方略(Learning Strategies: LV)

1) 病棟業務

指導医や上級医の指導の下、入院患者の診察、治療に携わり、多くの症例の診療を経験することにより、耳鼻咽喉科疾患の基礎知識、治療法を習得する。

2) 外来業務

指導医、上級医の外来診療に同席し、問診および所見の取り方、診断までの道筋、検査の解釈、治療法を学ぶ。その後、指導医、上級医の指導の下、実際に問診、診察(鼻鏡、耳鏡、ファイバースコープなどの手技を含む)を行い、検査計画を立て治療方針の決定に参加する。

3) 手術

手術日には可能な限り助手として参加し、頭頸部手術を学ぶ。手術進行を理解して助手を務められるようになった手術に関して、指導医が安全と判断した手術手技(皮膚縫合、簡単な切開剥離など)の一部を行う。

4) カンファレンス

毎週、病棟および外来患者カンファレンスと術前患者カンファレンスを行い、診断および治療方針に関する問題点、手術適応などを協議することにより、耳鼻咽喉科疾患に対する知識を深めていく。東京慈恵会医科大学耳鼻咽喉科学教室のカンファレンスにも適宜参加して、当院では遭遇できない疾患の症例報告、最新の耳鼻咽喉科学情報などを聞き、さらに知識を広げていく。

4. 評価(Evaluation: Ev)

EPOC(オンライン臨床研修評価システム)および評価表による評価。